

2020年度第1回アドバイザー・グループ会議開催



2019年度の報告と2020年度の活動計画にご助言頂くため、2020年4月9日にセンターのアドバイザー・グループ会議がバーチャルで開催されました。まず、2019年度については、前年度を大きく上回る18人の方の採用・昇進事例の報告が歓迎されました。詳しくは、このホームページからアクセスできる2019 Annual Report/ 令和元年度年次報告書をご覧ください。(https://hrc-gh.ncgm.go.jp/files/uploads/HRC-GH_AR2019.pdf)

一方、部長級のシニア・ポストへの送り込みに欠けているため、候補者となりうる40～50歳代の応募者の競争力強化に取り組むべきであるとの指摘がありました。人材登録された方のプロフィールを見ると、この年齢階級の方は、国内でのキャリアはありますが、国際組織での管理運営経験が十分ではない方が多いので、その強化策を探ることとなりました。これに関連して、外務省国際機関人事

センターより、本年度のJPOには、325人が応募し、50～60人を派遣する予定である、まだ若干名にとどまっているが、中堅職員派遣制度を設けて、JPOの年齢を超えた方の派遣も開始したとの情報提供がありました。2020年度の活動については、添付のように、国内公衆衛生系大学院の進路指導教員向けのティーチャー・トレーニング・ワークショップ(8月)、規範セッターとなる各種専門家委員会への参加に関わるワークショップ(10月)、グローバルヘルス・ディプロマシー・ワークショップ(12月)、恒例のGo UNワークショップ(12月)などを企画していますが、新型コロナウイルスの影響を見ながら時期と開催形態(バーチャル開催など)を検討することとなりました。開催が決まれば、センターのHPと人材登録情報に基づく個別メールでお知らせいたします。

日程	活動
7月 中旬	各種個別進路相談会・講演会
8月 28日 (予定)	進路指導教員向けティーチャー・トレーニング・ワークショップ (Zoom 開催)
9月 中旬	2020年度第2回アドバイザーグループ会議
10月 3日 (予定)	WHO 専門家委員会就任に関するワークショップ
11月 1-3日	グローバルヘルス合同学会
12月	上旬 グローバルヘルス・ディプロマシー・ワークショップ
	中旬 Go UN ワークショップ
1月 中旬	UN 諸機関人事政策調査
3月 下旬	国際機関邦人職員数調査

国際機関の採用動向

COVID-19のエピデミックスにも関わらず、採用活動は続けられています。特に、実務に近いP3-P4のリクルートが活発で、加盟国をサポートするため、短期専門家のリクルートも盛んになっています。

ピンチはチャンスと言います。国連機関に就職を考えている方は、なにかと集中できない環境下にあるかとは思いますが、人材登録・検索システムを使って夢の実現に向けて頑張ってください。当センターにおいてもオンラインでサポートいたします。

■ グローバルヘルス人材戦略センターのBCP (Business Continuity Plan)

基本的に在宅勤務としておりますので、ご連絡はメールでお願いいたします。緊急事態宣言解除後は、感染の状況などを踏まえて業務体制を見直してまいります。サポートを希望される方は、ホームページのお問い合わせフォーム (https://hrc-gh.ncgm.go.jp/contact/) からご連絡下さい。

■ 人材登録のお願い

5月現在、約550名の方が人材登録・検索システムに登録されており、ご希望に応じた空席情報がマッチング・メールにて届くようになっております。人材登録・検索システムの使い方に関する動画も登録ページに掲載しています。未登録の方は登録されますようお願いいたします。
https://hrc-gh-system.ncgm.go.jp/



グローバルヘルス・ロールモデル・シリーズの掲載

国際保健分野でのキャリアを考える際ネックになることが、ロールモデルになるような人物が身近にいなかったのがキャリアパスを具体的にイメージできないということをよく聞きます。そこで当センターでは世界の様々な地域で、また、グローバルヘルスの多彩な方面で活躍する日本人の方々がご帰国された際に熟練したインタビュアーにお願いして、キャリア形成のプロセスをお尋ねし、センターのホームページ上に公開させていただくこととしました。

第3回は、WHO（世界保健機関）感染症ハザード シニアアドバイザーの進藤奈邦子氏と、国境なき医師団（MSF）日本 手術看護師の白川優子氏です。

インタビュアー 清水眞理子

第3回



WHO（世界保健機関）感染症ハザード シニアアドバイザー 進藤 奈邦子 [しんどう なほこ]

東京慈恵会医科大学卒、専門は内科学、感染症学。英国セントトーマス病院、オックスフォード大ラディクリフ病院、慈恵医大内科学講座での臨床研修を経て、国立感染症研究所、感染症情報センター主任研究官として勤務。2002年よりWHOに派遣、2005年よりWHO職員。感染症アウトブレイク情報の収集と解析、フィールドレスポンス、インフルエンザ流行防止策などを担当。SARS 鳥インフルエンザ、インド洋津波、アフリカでのウイルス性出血熱、新型インフルエンザ、中東呼吸器症候群コロナウイルスなどのWHOレスポンスを担当。2012年1月よりインフルエンザ及び呼吸器系疾患のチームリーダー。2013年1月よりさらに担当範囲を広げ、新興・再興感染症の臨床管理および研究アジェンダ、ウイルス感染症に対する新戦略イニシアチブ BRaVeを率いる。緊急事態にはWHO戦略的健康危機管理センターのスタッフとして行動し、世界的な健康危機となる重症急性呼吸器系疾患や鳥インフルエンザ、エボラ出血熱のアウトブレイクを担当。チームと共に世界各地で、極めて伝染性・危険性の高い病原体の感染制御・患者治療に関わる。2015年7月に調整官（上級管理職）に就任。重症感染症患者の集中医療管理とサイエンスの最先端をつなぐ特殊ネットワークWHO EDCARNを組織、21世紀型感染症アウトブレイク対策を展開する。WHOの危機対応強化をねらう組織改革に伴い、2016年10月にEDCARNに加え、新設されたラボネットワーク、モデリング・予測ネットワークを束ねるマネージャー（管理調整官）に任命される。2018年1月よりシニアアドバイザーとしてWHOの感染症危機管理のブレイン役を務める。

高校時代アメリカに1年留学、建築家、ランドスケープデザイナーになりたいと思ったこともありましたが、弟を若くして脳腫瘍で亡くし、弟の遺言で医師を目指しました。1990年に大学を卒業、脳神経外科で研修、大学からの選抜留学生として、研修時代にロンドンとオックスフォードで臨床経験を積みました。病院勤務を4～5年続ける間に結婚して子どもができて内科に転向、医学博士号取得コースで研究しながら診療を続け2人目を出産した頃、国立感染症研究所感染症情報センターができて、リサーチレジデントとして入職しました。国立感染症研究所はWHOの西太平洋事務局の協力センターに西太平洋事務局の協力センターにもなっていたのでそこから世界への道が開けました。

2002年から2年の任期でWHOのジュネーブ本部に派遣されました。WHOのインフルエンザ・パンデミック準備計画を強化すること、疫学諜報活動でインフルエンザ・パンデミックを早期に発見すること、という目的で、感染症のアウトブレイクを察知する諜報活動の部署に配属になりました。当時エボラやマールブルグなど出血熱系のアウトブレイクがアフリカで起こっていました。私はインフルエンザ・パンデミックの予兆をつかむために世界中の重症肺炎の集団発生を追いました。

（続きは https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role_model/ でお読みいただけます。）



国境なき医師団（MSF）日本 手術看護師 白川 優子 [しらかわ ゆうこ]

1973年11月7日埼玉県生まれ。高校卒業後、4年制（当時）坂戸鶴ヶ島医師会立看護専門学校に入学、卒業後は埼玉県内の病院で外科、手術室、産婦人科を中心に約7年間看護師として勤務。2006年にオーストラリアン・カソリック大学看護学部を卒業。その後約4年間、メルボルンの医療機関で外科や手術室を中心に看護師として勤務。2010年よりMSFに参加し、スリランカ、パキスタン、シリア、イエメンなど9か国で17回の活動に参加してきた。著書に『紛争地の看護師』（小学館刊）。

私は将来働くことを考えて就職率の良い商業高校に進学、珠算や簿記を学び、休日は友人とショッピングに出かけたり、アルバイトしたり楽しい高校生活を送っていました。高校3年になると就職活動が始まり、当時はバブルが崩壊する前だったので求人もたくさんあって、周りの友人は次々内定をもらっていました。就職に有利と思って商業高校に進学したのに就活する気になれず、決して働きたくないわけではなくやりたいことが見つからず、悶々とした日々を過ごしました。

偶然、友人が「看護師になりたいから商業高校では学んで

いない教科を強化するため予備校に通って準備している」と言うのを聞き、「やりたいことはそれ！看護師になりたい」私の心が反応しました。そこからまっしぐら、看護師になるには、看護学校に入るにはどうしたらいいか調べました。

看護師養成の専門学校受験には高校普通科で学ぶ科目の履修が必須でした。准看護師から正看護師への道もありましたが、出身の埼玉、自宅近くに当時珍しい4年定時制の正看護師になるための学校、坂戸鶴ヶ島医師会立看護専門学校がありました。商業高校でも受験可で道が開けて、私は3期生として入学しました。地域の病院で看護助手として働きながら看護師になるための勉強を続け、授業の一環としての病院実習もありハードな日々でしたが、36人の仲間と励ましあいながら頑張りました。卒業後、看護師として7年間、2つの病院で働き、外科、手術、産科で経験を積みました。

MSFのことは小さい時から知っていて、すごい人達がいると憧れていましたが、自分とは遠い存在だと思っていました。（続きは https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role_model/ でお読みいただけます。）